

成長に伴う被服行動の変化 ー小・中・高等学校を通じた男女差ー

○布施谷節子* 亀井佑子** 林隆子*³ 高部啓子*⁴
 (和洋女大*, 都立三田高**, 広島大*³, 大妻女大*⁴)

【目的】筆者等は先に、成長期の女子を対象にして早熟・晩熟の観点から被服行動の変化を検討した。今回は、小学校1年から高校2年までの11年間における被服の選択行動やファッション意識に関して、男女差を中心に成長に伴う変化様相を検討した。

【資料・方法】1998年9月に、都立高校2年生の男子116名、女子136名を対象として、彼らの小学校1年から高校2年までを振り返る形で、被服行動に関する意識調査を行った。調査項目は、体つきの意識、髪型の意識、髪を染めることについて、服と体との関係、ファッション感覚、友達の服に対して、流行の意識、よく着ていた服、こだわりの色、衣服の調達方法の合計10項目である。解析方法は、男女別に学年毎の度数分布をとり、隣り合う学年毎の独立性と、学年毎の男女の独立性についてカイ二乗検定を行った。また、成長の変動期にあたる小5と中1ならびに最終学年の高2に焦点を当てて、体つきの意識と流行の意識を基準とした他項目とのクロス解析を行った。

【結果】①ファッション感覚、よく着ていた服、こだわりの色、衣服の調達方法、髪型の意識については、小1から高2まで一貫して男女差は有意であるが、友達の服との同一性・差別性では一貫して男女差はみられなかった。②体つきの意識は小4から、流行に対しては小5から男女差が有意となる。それは男子は中1からこれらの意識が強くなるのに対して、女子の意識はそれより2、3年早いためと考えられる。③小5、中1、高2における「体つきの意識」と「流行の意識」と他項目とのクロス解析では、ほとんどの項目で有意であったが、「体つきの意識」と「体と服との関係」は有意ではなかった。